

平成24年度 水稻作柄現地調査報告書

平成24年 9 月
社団法人 北海道米麦改良協会

【調査月日】 平成24年 8 月28日(火)～30日(木)

【調査先】

◎道南班：当別町・蘭越町・道南農業試験場・北斗市・厚沢部町・今金町・厚真町・長沼町・中央農業試験場岩見沢試験地

◎道央・道北班：美唄市、奈井江町、新十津川町、深川市、沼田町、小平町、士別市
上川農業試験場、旭川市、東川町、富良野市
(各市町のほ場は、現地奨決ほ場を中心に調査)

【参加人数】 約80名（部分参加含む）

【総合検討会】平成24年 8 月30日(木) 空知農業会館 4 階大会議室

標記調査の実施にあたり、道農政部・農業改良普及センター・農業試験場をはじめとする関係機関の皆様にご協力・ご配慮をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

本調査で得られました各地区の作柄概況や総合検討会で纏められました収穫作業に向けての留意事項について、下記のとおりご報告いたします。

つきましては、内容をご査収いただき、今後の取り進めにあたっても引き続きご配慮いただきたくよろしく申し上げます。



1. 各地区における作柄概況について

【道南地区】

・ 6月上旬の好天により活着・分けつは順調で茎数も平年を上回って推移しており、生育も2日早く進んでいる。(茎数：8/15 現在 平年比103%)

・ 開花期間は平年より短く揃いも良好であり、稔実歩合については、冷害危険期・開花期に低温を受けた影響は見られず、ほぼ平年並みに確保される見込である。
・ 1平方㍍当たりの粒数は33,000～35,000粒程度と平年より多い傾向である。

【後志地区】

- ・活着が順調であったことや初期生育が良好であったことから、茎数は平年より多く推移している。(8/15現在 平年対比112%)
- ・穂揃いは良好で出穂期の地域差も少なく、登熟期間も比較的日照に恵まれたことから登熟は順調に進んでいる。
- ・冷害危険期に低温となった時期があったが、稔実歩合への影響は限定的と考えられる。
- ・生育進度は2日遅れであり、成熟期は平年並みの9/16頃と見込まれる。

【日胆地区】

- ・初期生育が良好であったことから、分けつ始めはやや早く、葉数・茎数はやや多く推移してきた。
- ・開花も概ね順調に推移し、穂長・穂数は平年並みに推移している。
- ・生育進度は8/15現在、早1日で推移しており、成熟期は9/17と4日早い見込。

【石狩地区】

- ・融雪遅れにより、耕起・は種作業は遅れたが、出芽後の生育は順調に推移し、出穂期は平年並となっている。(ほ場間差がやや目立つ)
- ・茎数は平年よりやや多く推移している。
- ・遅れ穂も目立ち、穂の揃いにバラツキがある。
- ・生育進度は2日遅れであるが、9/20より前に刈取開始見込である。

【空知地区】

- ・南部では前歴期間・冷害危険期に気温が大きく低下した日があったが、葯長調査の結果、不稔歩合は少ない見込。(不稔歩合は平年並み～やや少ない見込)
- ・穂数は平年を1割程度上回り、総粒数も「平年並み～やや多い」状況にあるが、登熟期の気温経過から粒の充実について懸念される。

- ・生育は8/15現在、遅1日で推移しており、成熟期は9/18～9/21と推測される。
- ・中央部では穂数・粒数が平年より多く、不稔歩合は少ない傾向。(概ね10%以下の見込)
- ・ただし、穂揃いは良くなく、バラツキがある。
- ・粒数は多い(1平方メートル当たり35,000～36,000粒)が、登熟ムラにより歩留まり低下の懸念がある。(美唄・新十津川)
- ・収量が見込まれる分、成熟期はそれほど早くなく、9/15頃の見込。(美唄・新十津川)
- ・北部でも、茎数・総粒数とも平年を上回り、不稔歩合も平年並みからやや少ない傾向にあることから、平年を上回る収量が期待できるが、登熟ムラ・バラツキの懸念がある。(冷害危険期に低温を受けた影響は回避された。)
- ・成熟期は9/11～12頃の見込。

【留萌地区】

- ・生育進度は平年並みに推移し、茎数は平年並からやや少ない。
- ・不稔歩合は3%程度と平年より少なく、粒数も平年並みの見込であることから、収量も平年並み程度と見込まれる。

【上川地区】

- ・北部では冷害危険期に最低気温が13℃を下回る日があったが、日照時間が確保されたこともあり、不稔歩合は平年並みかやや上回る程度におさまる見込である。
- ・穂数は平年並みで一穂粒数は平年より若干少ないが、大きな減収にはならない(概ね平年作確保)見込である。
- ・中央部では、移植後の高温により初期生育は良好に推移し、分けつも旺盛で8/15現在の穂数は平年値を上回っている。
- ・冷害危険期に低温となった期間があり、山間部の一部では2割程度の不稔が発生した



ものの、中央部では影響が少なく（平年並みかやや少ない）、1平方メートル当たりの稔実粒数は33,000～35,000粒と平年を1割程度上回っており、良好な作柄が期待できる。

- ・南部でも移植後の好天により活着および初期生育は良好であり、穂揃いも良かった。
- ・穂数は平年並み～やや多いが、一穂粒数は平年並みか少ないことから、総粒数は平年をやや下回っている。
- ・しかしながら、不稔歩合は平年より低く、倒伏がなければ登熟歩合も良好と見込まれ、平年以上の作柄が期待できる状況である。

【新たな取組み】

- ・本年の作柄調査においては、従来の奨励ほ・農業試験場のほ場の他、昨年度北海道優良米生産出荷共励会で最優秀賞を受賞した千徳氏（奈井江町）のほ場を視察させていただきました。
- ・特別栽培米・高度クリーン米の栽培に取り



組まれている状況や、全量側条施肥を行っている試験ほの様子などを視察させていただきました。

- ・一般ほについても、側条施肥の実施、中干しの実施、ケイ酸資材の散布など基本事項の励行に努められ、良好な生育にあるほ場を視察させていただきました。

2. 総合検討会における協議事項について

- (1) 各班の参加者から、概要報告（要旨は上記のとおり）を頂いたあと、竹内上席普及指導員（道農政部・上川農試在勤）を座長とし、本調査のまとめと課題整理を行いました。
- (2) 全道的に収量構成要素・生育進捗ともまずまずの状態で推移しており、総粒数や不稔歩合を勘案すると平年並以上の作柄が期待できる状況にあるが、8月下旬から高温傾向が続いていることや登熟期の気温も前半が低く後半が高いというこれまでに例の無い気象経過となっていることが品質面にどのような影響を及ぼすのか予測し難い面がある。
- (3) また、稈長がやや長めのところもあり、台風・大雨による倒伏も懸念材料である。
- (4) タンパク質含有率については、登熟が概ね良好に進んでいること、また、アミロース含有率についても登熟期後半は高温で推



移していることから、いずれも大幅に高くなることは考え難い。

- (5) 課題としては、登熟期後半の気温上昇により、遅れ穂に実が入り、圃場内でのバラツキが発生することにより、収穫適期の判定が難しい状況になることが想定されるため、刈り遅れによる品質・歩留まりの低下にならないよう、例年以上の注意が必要である。(本会からも配布予定の適期収穫啓発リーフレットを活用いただくよう案内した。)
- (6) 干ばつによる品質低下にも注意する必

要があり、道北・道央では適度な降雨により土壌水分が確保されているものの、道南では降雨が少なくひび割れが発生しているほ場もあり、必要に応じて「走り水」を行うことが必要。

- (7) また、今後も高温が長く続き、登熟期が早まることが想定されるので、気象条件の変化にすばやく対処できるよう、収穫や乾燥調製の機械を早めに準備することや急な気象変動に備えた対応が必要であると纏められました。

以上